
秋の夕暮れ

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋の夕暮れ

【NZコード】

N2088Z

【作者名】

K_Sayuto

【あらすじ】

ある秋の日、日本の人口は男子が1人減つて、女子が1人増えたと思う。

高校で野球部に入っていた水木 秋次はある日起きたと女の体になっていた?

よくある異世界物でもなくよくある転生物でもなく、よくあるなつちやつたパターン。神はむかんけー。

更新速度は出来る限りどんどん更新してこきます。

まえがき

俺は水木 秋次、只今人生最大のいや、人類最大の危機に立つて
おります。

昨日は部活の練習の後に普通に親友で幼馴染の静流と一緒に帰つ
て、家についたら風呂入つて、リ カーン見ながら飯食つて、予習
なんてめんどくせーと睡眠に入つたわけだ。

で、それがどうやつたら今の状況につながるのかと考えて
いる。繋がるどこか接点すらちげえ。そもそも次元がちげえよ。

で、今更だけど今の状況はというと朝起きて寝癖があるか確認し
ようと鏡を見たらそこに写っていたのはとんでもないほどの美少女
なわけで。勿論オレツ娘つて訳じやない、いや他人から見たらそれ
以外に何にも見えないか。

言い換えよう、俺は男だ。少なくとも昨日まではそうだったはず
なんだよ。

第一話 僕が女に！？（前書き）

水木 みずき
秋次 しゅうじ

ある日起きると女の体になつていた主人公。女体化後はストレートな長髪で黒髪、目はパッチリとしていて小顔で肌は白く、胸が小さいこと以外スタイル抜群で身長が低い美少女

水木（水木） かずえ
和枝

秋次の母親でスタイルは良くなしの割に結構若く見られている。

田村 たむら
静流 しそる

秋次の親友で家族よりも信頼できる存在。秋次に女になつてしまつた事を家族よりも先に打ち明けられた。

第一話 僕が女に！？

「なんだよ！」つや

鏡を見て放心する。少し経つて俺はある物を確認しようと思つた。そう、男の財宝である伝説の如意棒と黄金の宝玉を。ズボンの中に手を入れるとそこには何もなく妙にスカスカしていた。

そのうちうういやあさつきの声も妙に高かつた様な・・・。

「あー、あー」

と高い声が出る。やべえ、この顔とか声とかまじかわええ。俺はあえて視界のしたの方の本来胸板がある位置にある小さな膨らみは無視しておく事にした。だつて触つてみて感じちゃつたりとかしたらヤバそうだったから。

あーどうしようかなこれから。などと考えていると、秋次起きなれーいとオカンの声がしたので俺は

「今準備ちゅー

と危うく言つてしまいそうになり慌てて口を閉じたが危機は去らなかつた。何も返事がない事を不審に思つたのかオカンが階段を登つて来ている。

ヤバイ、どうしよう。そりだつ、鍵をかけよ。

ガチャ

と鍵がかかる音がして安心する。

「秋次ー、なんで鍵なんて閉めてるのー？開けなさいー」

とオカソがドアをノックしていつ。俺は

「風邪引いてるから今日は休む

と言つてしまひそうになるが止める。俺は机の上にある紙に”風邪引いたから今日は休む、喉がやべえほど辛いからうつらないように俺を隔離する”と綺麗とは言えない自分で書きそれをドアの下の隙間から通す。

「あー、風邪そんなに酷いなら病院行きなさい」

病院だつて、冗談じゃないそもそも今の俺じゃ保険証とか使えねえだろ？

俺は”行くのも辛いから”と書いて紙を送る。

「そう、それじゃ今日は母さんもお姉ちゃんもいなかりやんとなんか食べたりしなさいよ

とオカソが去つて行つたので一息付く。つて、今ので打ち明けにくくなつた気がするのは俺だけだろうか？でもどうすりやいいんだ？女の体の事なんか一人もわからんねえし。ま、考えてもしゃーないし寝るか。

今日は秋次休みか、まつプリントとか持つてつてやるつこでお見舞いでもしてやろーかなあと思つてみるナビこざなうつじようど思うとめんどくせえ。

ピロロロロ、

ん、メールか。つと秋次からだ。えつと内容は”今日の放課後、静流空いてるか？”だ。何も予定とか・・・・ないよな、よし。俺は”大丈夫”と送ると”じゃあ今日来てくれ”と届いた。

今日は6時間授業だったが秘技、全教科睡眠術により体感時間的には2～3時間で終わつた気がした。

放課後、俺は約束通り秋次の家へ來た。インターほんを鳴らすと誰もこなかつたがメールで”開いてるからはいつて”と言われたので俺は玄関に入り秋次の部屋の前まで來た。

「しゅーじー、きつたぞー」

と俺がそう呼びかけると下から紙が來たので読んでみると”話がある、絶対信じてくれるか？”と書いてあつたので。

「なんの事だかわからんねえけど俺は信じるぞ」

と言つとガチャと鍵の聞く音がしてゆつくりと顔が覗いてくる。しかしその顔は秋次の物ではなく女の子の顔だつた。

「あれ、秋次……の彼女?」

秋次には彼女はいなかつたと思うが……まさかこの事だつたのか話つて?と俺が思つたがその話はそれと全く違つた物だつた。

「ち、違う……俺が、秋次……だよ」

「ナンダツテ?コノオンナノコガシユウジダツテ?」

「ああ、同名か。でこの家の息子の秋次は?」

俺がそういうと秋次と名乗つた女の子は少し俯いてから顔を上げ。

「だから、俺がこの家の息子の秋次。お前の親友の秋次だよ」

は?何を言つてるんだこいつは、そもそも息子つてのは男だろこいつはどうみても女じやないか。

「おいお前、『冗談もいい加減にしとけ』

と俺が声のトーンを低くし少しキレ気味な喋り方で言つと。そのいかれた女の子は一瞬ビクッと身体を強張らせる。

「だ、だから、俺がしゅ」

「いい加減にしろしつつてんだよ、おい秋次何処だよ悪ふざけなんかしてないで出て来いよ」

俺がさつきの喋り方のまま壁を叩いて言つと女の子はさつきよりも怯えた表情になるがすぐにもとの表情に戻し。

「好きな物は麺類、嫌いな物は柑橘類、誕生日は9月1日、A型、両親は共に自営業」

と顔すら合わせた事のない女の子が言つたのでびっくりしたがどうせ秋次が前もって言つように指示していたのだろう。

「なんでも良いから聞いてみてよ秋次なら絶対にわかるような事、全部答えて見せるよ」

女の子はさつきの表情のままそう言ったので俺は色々と聞いて見る事にした。

「秋次の初恋は？」

「明美さん」

「俺と秋次が出会ったのはいつ？」

「小学2年生のとき遠足の班決めで余つてたお前を俺が誘つた時」

「俺の特徴は？」

「高所恐怖症、めんどくさがりや、物忘れが激しい、元不良、頭は悪い、むちむち」

つてこいつ本当に全部当てるやがる、本当に秋次なのだろうか？・
・・つてなんか俺すごい侮辱されてる気がする。

「あー、もうわかった」

「じゃあ信じてくれんのか？」

「信じない方が無理あるって」

「ここまで言わいたら信じる他ない。でもなんで女子の姿なんだ？」

「寒は・・・今日朝起きてみたら女になつて、ほら胸とか膨らんでるだろ」

そう言つて女子、否、秋次は俺の右手を胸の上に乗せた。俺は思いのほか胸が柔らかくて気持ちよく手をそのままにしておくと秋次の顔が真っ赤になつてた。

「そろそろ、離してくれよ」

「あっ、わらい」

俺は慌てて手を離した。

「それで、お前の両親は知つてゐるんだよ・・・な？」

一瞬ピクッと反応した、それだけ十分わかった。両親はまだ知らない。何故わかつたかって? だてに幼馴染やつてねえよ。

「お前ならもうわかつたよな、それで、お前から俺のオカシとかに言つてくれないか?」

「おせせう来ると思つたさ、まあ 親友が困つてゐのを見過せないし。」

「わあーったよ、その代わり今度奢れよ

「ありがとな」

「ひへ、今更感謝すんなよ気持け悪・・・くもねえな、今のお前なかなか可愛いぜ。ばつてえーモテるぞ」

「悪ふざけはもう寄せよ。こじても、改めて思つたけど・・・お前背たけえな」

俺が高いんじゃなくお前が小さいんだそう思つたけどまあ実際俺も高い方ではあるし秋次は女になつて2~3回つららに小さくなつたと思つ。と俺が考へていると。

「ただいまー

秋次の母親が帰つて來た。さて、ミッションスタート。

第一話 とつま、ミシシッポンパーク?

「静流、頼んだぞ」

俺がそう言いつと静流は任せると黙つてトトに降りて行く。俺もオカソに見つからぬように降りる。

「おばさん、お邪魔しています」

「あら、静流君じゃない。秋次のお見舞い?」

「まあ、そんな感じです」

「そうちつもひの子がお世話になつてゐるわねえ」

「いえいえ、それより今から重要なお話があります。おい、こいつ

トト

多分俺を呼んだのだろう。静流の横に行く。

「この子は?」

オカソが聞く。

「おばさん驚かないで聞いてください。この子は秋次です。今日朝起きたらこうなつてたみたいでさつき秋次にしかわからない様な事を聞いたら全部答えたので」

「秋次?本当に秋次なの?」

「ああ、オカソ。俺だよ秋次だよ」

「まあ、なんてこと。」んな・・・・・・可愛くなつちやつて

へ？

直後俺はオカソに抱きしめられた。あれ？オカソの胸がめつちやあたつてるけど興奮しない、つてか親に興奮するわけないか。

「オカソ、疑わないの？」

「静流君だつて言つてるし、私は信じるわ、お姉ちゃんやお父さんには私から言つておくわ。これから的事は全部任せなさい」

あれ？涙が出てくる。何時の間にか俺は声をあげて泣いていた。

「お、オカソ。ありがとう」

「あ、秋次。今日からオカソじゃなくてお母さんつて呼んで頂戴。それがお礼の代わりよ」

今まで一度もお母さんなんて言つたことはないから少し恥ずかしいがこのせいじょーがない。

「わかつたよ、お母さん」

「うん、秋次はひとまず部屋にいなさい。あ、静流君も秋次と一緒にいてあげてね。あ、くれぐれも間違えだけは犯さないようにね」

まつてお母さんなぜ最後のまつ笑つてたし。なんかこええよ。

「はい、できる限り間違いは犯せないよ頑張ってみます」

つておい静流完全拒否しろよ。

「わあて、上に行こうか」

静流がそう言つて俺の腕をつかむ。こええよ、前の俺だつたら簡単に振りほどけただろうけど今の俺じゃ筋力とか異常なほど落ちてるから振りほどく事も出来ない。

恐喝されるときつてこんな感じなのかなあ?

俺は静流に連れて行かれる形で自分の部屋に戻つてきた。

「それにしてもお前本当に女になつたんだなあ、力とか全然なくなつてるだろ」

「え、なんでわかんだよ」

「だつてお前さつとき本気で俺の手を振りほどいてただる」

それは本当のことだつた、本気でふりほどいたがビクともしなかつた。大体今まで静流にどんな事をされても恐くなかったのに(とあることにより全治2週間のけがを負わせられた過去あり)さつきは物凄く怖く感じた。もしかしたら物理的な事以外でも何か変わつているかもしけれない。

「お前これからどうするんだ学校とか行けんのか?」

たしかにそれは大きな問題だが今はそれ以上のもんだがいはある、今の俺に戸籍はない、つまりはたから見れば女になつたと騒いでいる謎の痛い美少女以外の何者でもない。そう思つていると、急に扉が開きお母さんが入つてきた。

「秋次やつたわ、お父さんがうまくやつてくれるつて。そのための精密検査とかやるから今すぐ来て欲しいつて、準備しなさい」

「準備つたつてどうすつやいいんだよ」

「着替えに決まつてるでしょ」

あー、着替えですかそですか。つて着替え？までまで、俺は健全な男であり健全な男がこんな可愛い美少女を襲わないわけがない、つてよく考えたらこの美少女つて俺じやん、流石に自分で自分を襲う事は出来ねえよ。でも待て、着替えたら見えてしまうんじゃないか？例の膨らみが。駄目だそんなものを見て平常でいられる自信がない。

「ビート秋次、顔真つ赤だぞ？」

ヤバい、いろいろと妄想してたら顔がめっちゃ熱い。てか、男のときにはこんなに熱くなんなかったぞ。

「う、うむせえ。つてか静流はとつとと出る」

「そうねえ、流石にそれはまずいわね」

とお母さんが静流を部屋の外に出しじつむを見る。

「ああ、着替えたわー」

は？

「いや、お母さんが着てくれるんじゃないの？俺は隠じてるから」

「何いつてんのよ、これからその体で何万回も着替えることになるんだから早めに慣れときなさい。それに」

それについては怖い予感が・・・

「こんな美少女が恥ずかしがりながら着替える姿って可愛いじゃない」

「んの、あ・く・ま。

第三話 身近な落とし穴（前書き）

水木 みずき
柚木 ゆずき

秋次の父親。職業は？と聞かれれば。風の吹くまま気の向くままと答え。普段は何やってるんだ？と聞かれれば。とある企業の社長と答え。今までどこ行ってたんだ？と聞かれればボランティアとかと答える。相当一般とずれている謎の多い人

第三話 身近な落とし穴

結局俺は、文物の服などを持つてるわけではないので（持つていたら変態だつてwww）ジーパンにパークーというラフな格好にしたわけだ。しかし・・・・、俺が普段着ている服は全部ブカブカだつたので俺が小学生の時に着ていた服がぴったりだつたので助かつた。お母さんがとつておいてよかつたと思う。

「それじゃ静流君、お留守番頼めるかしらねえ」

「ええ、大丈夫です。秋次、まあがんばってこい」

こいつ顔では真剣な振りしてるが内心では面白がってるし。ほら、口を良く見てみるとひくひくしてるじゃねえか。帰つたらいろいろといじつてやる。

いきなりですが、主人公はあまりの恥ずかしさによりタヒつてこの小説は終了いたしました。というのも、精密検査でいろいろと図るわけだ、検査する人が女性だったのは良かつたんだ、多分・・・・。そこで聴診器あてられたり、人間ドックやられたり、拳句の果てにはスリーサイズを測られたときに測る人の手が俺の胸に当たつて声をあげてしまつた。肌の感覚がすごい敏感になつてた・・・・。現時点で確認できた変化はまず体が女になつてしまつた事だがそれに運動して肌の感覚が敏感になつてた、まあ後は身長とか髪とか筋力とか。精神面では、めっちゃ怖がりになつてた事かな、もしかしたら涙もろくなつてているかもなそれは結構つらいな。これから先こんなでやってくるのだろうか？まあ、検査の結果はあと数分で出るらしいのでそこで健康であることを願う限りだ。俺が座つて待

つてると一人の男が田の前に現れた。

「やあ秋次、気分はどうだ?」

俺が顔をあげてみるとそこにはよく知っている人の顔があった。

「オトン……、気分は、最悪かな」

「そうだ、俺の事もお父さんって呼んでくれないか、それにほら」

オトン、いやお父さんが手を差し出しその手には何かがあった。
俺はそれを見ると改名用の紙だった。

「これは?」

「いくらなんでも女で秋次は変だろ、だからいつそ名前も変えて
しまおうと母さんと話し合ったんだ」

いつの間に話し合つたんだよ、それにしても結構親つて子供の事を
を考えているんだな。深くそう思つよ。

「それで名前の事なんだが、あまり変えるのもお前がなれるのが
大変だろ。だから、お前の字からとつてあきだ、漢字はそのまま秋
でどうだ?」

秋か、読み方だけなら似ても似つかない名前だけどまあそこはや
っぱ慣れろつてことか。漢字を間違つ事はないしそれでいいな。

「それでいいよ」

「よし秋、受け取れ」

お父さんがそう言ってポケットから何かを取り出した。それは身分証明書でもうすでに水木秋という名前が書かれていた。お父さんって本当はマジシャンだったのか？

「いやそんなんに驚くな、もうすでにこいつっておいたんだよ。お前がいやだつて言つたら再発行しようと思つてただけだ。そういう、検査結果だがいたつて健康」

「本當か、よかつたあ」

「やう早まるな、いたつて健康じやなかつた」

え？ 今何で？

「お前は重度の日光過敏症でな。まあ今の時間帯はもう真っ暗だから何もなかつたと思つたが昼間は日光に当たつてはいけないんだ」

「それって不可能に近くない？」

「日傘や、日焼け止めなどを使えばいいんだがそれでも日の光にあたり過ぎるとこりいろと大変なことになるから気をつけろ」

それはそれは、相当地ひいて。俺これから生きていけるか自信無くなつた。

「で、お父さんもしかして・・・戸籍も変えられた？」

「まつまつは、心配するな。しつかりと水木 秋 性別女に変えたが」

「ひやせり四籍とかの心配は必要なくなつたよつだな、こつたいどんな手段を使つたのやう。

「もうだ、母さんはこれから仕事へ「キャバクラか?」

「違ひ、こたつて健全なコンビニのパートだ。それと、静流君が家で留守番してくれてるんだつて? お金あげるから彼と一緒にどつかでたべてきなさい。お釣りはこすかににでもしなさこ、父さんも今日は帰りが遅くなるからな」

やう言つてお父さんは財布から一万円を取り出す。普通に考えて5千円あれば十分なんぢやないかと思つがあまりは好きに出来るのであえて何も言わずにこもりつておく。つひひや絶対7千円程度余るぞ(笑)。

「わかつたアネキは?」

「そつちは聞こへないが多分今日も遅くなるんぢやないか?」

「ふあーー」

「そつこつて俺はあくびをしながらドアノブに手をかねてひつするが。

「ぐぶつ

「ぐぶつやら身長が縮んでいたのでドアノブ(もともといいのは普通

のより高い位置にあつた)が顎にあたつた。

「大丈夫か、秋? 顎が赤くなつてゐるじゃないか。女の子になつた
んだから体を大切にしなさい」

「ふわあーい

なんか、いろいろと考えていたけど結構日常面で相当大変かもな
あ・・・・。戸籍とか大きなことを考え過ぎてそういう身近な事
を全く考えていなかつた。THE灯台もと暗し・・・だな。

第四話 危ない訪問者（前書き）

田村 佳代

静流の妹で俗に言う・・・。いろいろと危険な人物でありどうやら秋次もとい秋の事が好きなもよう。

第四話 危ない訪問者

「かえつたぞ～」

俺は家の扉を開けながら奥から一人の男が歩いてきた。 静流だ。

「よお、どうだった？」

「どうだったといわれてもなあ、いろいろとあった

俺がそういうと「何があった？」と聞かれた。出来れば聞いてほしくなかつたような気がするような気がしない様な・・・。

「なんかさ～、戸籍とか普通につくつかえてもらつたし改名もしちやつたし。でも一番は・・・・・この体に持病があつた

「持病！？ それでお前は大丈夫なのか？ 命にかかるような事なのか？ えっと、それで」

「落ちつけよ、お前の事じゃないだろ」

「俺の事じゃなくてもお前になんかあつたら俺だつて悲しいんだぞ」

急に静流は怒鳴り俺は一瞬ビクンとしてしまっかりし後ずさつてしまつた。

「わらい、急に怒鳴つて。でもな、ちゃんと親友としてお前を心

配してんだからな。それで病気はビックなんだ?」

「うん、日光課金病?だっけか」

「日光過敏症の間違えか?」

「そー、それそれ

静流はフムと考えた後。

「じゃあ、今度必要なものでも買いに行くか?」「

必要なものとな?

「何が必要なんだ?つて顔してんな。要するに田にあたっちゃん
けないんだから日傘とか日焼け止めとか帽子とか必要なんじやない
のか?」「

「なるほー、さっすが静流だな」

と俺が言ったところで……ピンポン……ヒンター ホンが鳴
る。

「あ、静流待つとけ出てくるか!」

と俺は行つて玄関まで行き扉をあけると。

「すいませ ん、うちの兄がお世話にな、つづつつー!?..」

そこには一人の女の子、静流の妹の佳代ちゃんがいた。

「どうして、先輩の家に女の人が……。まさか、先輩の彼女?」

「いや、ちがつ」

佳代ちゃんは目を虚ろにし四次元には通じていないポケットからたたたたつたーんという効果音もなく一つの折りたたみ式ナイフを取り出しそれを広げ両手で持つ。

「先輩は私だけのもの、誰にもやらない」

佳代ちゃんはそれを俺に突きつけ飛びかかってくるが俺はそれを紙一重でよけるが動きの要領が違っていたので本当だつたら普通によけられたはずがこけて倒れてしまつた。いきなりながら大ピンチ、この小説はもう終わるのか?

「なんか、私の第六感が貴女を傷つけるのは先輩を傷つけるのと一緒にって言つてるけど私は悪い子だから無視しちゃうね」

いや、その通りだよ。無視しないでくれ。つてマジでヤバい、死ぬ前に行つておくさつきのメタ発言すいませんしたー。

佳代ちゃんはナイフを振り上げる。終つたと俺は思つたがいつまでたつても痛みは来ない。ああ、痛みもないまま天国へ行けたのは幸いだつたな。

「やめろ佳代!」

俺はそんな声が聞こえたような気がして目をあけると佳代ちゃん

の手を押されて、いる静流が田に映った。

「お兄ちゃん！？まさか・・・。そう、先輩の彼女じゃなくてお兄ちゃんの彼女だったのか。でも、お兄ちゃんも私だけのものなんだからどの道ここへあなたには三途の川を渡つてもいい」

佳代ちゃんは静流の手を振り払い俺にナイフを振り下ろす。今度こそ終わつたな、天国では俺どんな姿なんだろ。男に戻つてたらいなあ。と覚悟を決めるがまたもや痛みはなかつた。今度こそ田を開けたら田の前に川があるんじやないかと思う、それとも異世界に転生でもするのかな？俺はそう思い田をあけるとそこは俺がよく知つている場所、俺の家の玄関だつた。

「あれ、生きてる？」

俺は顔をあげるとそこには悲しそうな顔でナイフを持つていない佳代ちゃんがいたナイフは佳代ちゃんの足元に落ちていた。

「どうして、貴女が先輩なの？」

俺は少しの間意味がわからなかつた。

「どうして、女になっちゃつたの？」

俺は静流が話してくれたのだと思つたがそんなすぐに信じるわけもないと思つて静流のほうを見るとのびていた。多分振り払われたときに頭でも打つたのだろう。

「どうしてなの？なんで、こんなことになつてゐる先輩」

まさか、見破ったのか。この人は看破眼の持ち主ですか?と思つていただがさつき行つていていた事を思い出す。“第六感”とか“貴女を傷つけるのは先輩を傷つけるの一緒”と言つていた。まさか本当に第六感をもつていいのか?

「本当に俺だよ、秋次だよ。でも、どうして俺だつてわかったの?」

「うん、先輩の心と一緒に澄んでいて暖かくて、それに心紋が同じだつたから」

「心紋?」

「心紋っていうのはね、指には指紋があるでしょ。それと同じようなものが心にもあつてそれが心紋」

すごい、佳代ちゃんは人の心を読む事が出来るのか?俺はその事をすごく聞きたいと思つたがあまり他人に詮索されるのは良い気がしないと思つたので俺はやめておいた。

「ごめんなさい先輩、本気で……殺そうとした」

「いや、もういいんだよ。それより静流は?」

俺は静流のほうを指さし聞いてみると佳代ちゃんは静流の額に手を当てるところちらを向いて。

「大丈夫、脳内出血もしてないし軽い脳梗塞だから命に別条はない。起きたときにちょっとふらふらするかもしれないけど」

すゞいな、第六感では「なん」ともわかるのか。

「それより、先輩大丈夫?」

「ああ、大丈夫だよ。つと」

俺は少しフラッとして佳代ちゃんに支えられる。さつきまではいろいろあって気がつかなかつたけど佳代ちゃんの皿を見るときに顔を上げる必要がある。それはつまり・・・。

「ちつちやい先輩も可愛い」

と佳代ちゃんに抱きつかれた。佳代ちゃんももともと同学年の中では小さい方らしいが俺はそれよりも小さかった。なんか、自分はちっぽけだなと思う。

第五話 他に変わった事（前書き）

なんか、エロくするつもりはなかつたんだけど「うづ」ジャンル（文体化）の小説を書く場合つて相当なテクニックがないと回避する事は無理だと思つ。ちなみに俺にそんな技術はあるはずない。エロいのが苦手な人は今すぐ右回り360度回転して歩みを進めたほうがいい。結局はこっちに来るつていうね。

第五話 他に変わった事

俺が佳代ちゃんに抱きつかれてから数秒後、静流が起きた。

「あれ、ここはだれ？俺はどう？」

とふざけていたが俺と佳代ちゃんは華麗にスルした、いい加減降ろしてほしいと思ったのだがどうやら俺は佳代ちゃんよりも力がなくなつたらしくなんか抵抗しても無駄で終わる気がするのであきらめる。

「あ、そうだ。晩御飯をどつかで静流も一緒に食べりつて言つてたけど佳代ちゃんも来る？」

「うーん、お兄ちゃんは行きたいんでしょ？ でしょ。しううがないなあ私がお母さんに電話しといてあげるよ。どうせ今日ママナルドで言つてたし」

佳代ちゃんはさう言つて携帯を取り出し電話をかける。

「うん、そう、だから今日は先輩とお兄ちゃんと一緒に食べてく る。うんじゃあ・・・。おつけ大丈夫だったよ。トーレー、早速行こう！」

俺はそこまで行く行こうか考えていなかつたのだがあまり遠くへ行くのもめんべくかつたので近くのサザリアへ行くことにした。やっぱ狙いはミラノ風ドリアとミックスグリルだな。あの肉汁はたまんねえよ。

俺たちは家を出てサイゼリアへの道を歩みだす。

さつきのまでの威勢はどこに行つたのやら結構恐ろしい事になつていた。とりあえず入店した時までさかのぼつておく。

「私はなににしようかなあ、秋先輩はどうするんですか？」

「うーん俺は・・・・ってなんで俺が名前変えた事知つているの？」

「そりや、第六感ですよ第六感。ちなみに先輩がスリーサイズ測つた時の恥ずかしー出来事までわかりますよ」

わー、その事を言わないでくれえもつ思い出したくない声が出てしまつた、まだそれだけならセーフだと思つ。でもその声がちょっと口かつたんだよどうやつたら俺からあんな声が出るんだよ。

「秋次なんかあつたのか?つともう秋なのか」

季節が?俺の名前が?と思つたがおそらく後者だらつ。

「お兄ちゃん、女の子には男の子にはわからない事があるんだよ」

「そういうものなのか、そつか秋。お前ももう立派な女の子への仲間入りだな」

「それじゃあ私が」ですね。そうだ、もう先輩は全部が女なんだ。

それはつまりぼそぼそ

そのぼやぼその所は聞こえなかつた、うんせつとかつだ聞こえなかつたんだ。

「あーもひつゝ、やけ食にしてやる。//ラノ風ドリアと//シクスグ
リル注文だー」

「先輩はそれですかじゅあ私も//ラノ風ドリアで」

「じゃあ俺はリブステーキだ」

皆がそれぞれの注文が決まり、ボタンを押し店員に注文する。しばらくたち料理が運ばれてくる俺はミックスクグリルにナイフを刺し込み肉を切りフォークで肉を口に入れる。食べる前までは食欲がすぐあつたのだが肉を口に入れた瞬間にその気持ちは全て霧となつて消えうせた。

「肉が・・・・・めずい」

「えつ?どれ一口・・・・・ん、全然うめえじゃんか」

俺はまさかと思い嫌いなはずの「ローンヒグローンピースを食べてみると、案の定めちゃくちゃつまかった。

「あー、先輩味覚も変わっちゃつたんですか可哀想に。今の先輩にとつて肉は大嫌いなものなんですよねちなみに野菜は全部好きになつてますし先輩の嫌いな甘いものなんて食べるのが止まらないくらい好きになっちゃつてますよ」

「秋、それは俺が食つてやるから。そのドリアだけは食つとこ」

「ああ、肉が食べれないなんて・・・・」

俺は肉が食べれない事に悲壮感を感じながらドリアを食べるがドリアが3分の1ほどなくなつた時に今度は満腹感に襲われた。

「静流、俺もう腹いっぱいだ

「マジかよ、お前こないだまでこれ3つは食えただら

「ふえんふあいほふあふえふえふほう」佳代、口の中の物を片づけてから話せ

と佳代ちゃんが口の中に物をたくさんつめたまま話すがすぐに静流に制止される。

「はあ、腹がいっぱいですしい。水飲もう」

俺は水を飲むがそこである事に気がついてしまった。今日、一度もトイレに行つてない。もう漏れる寸前だといつ事に気がつき俺はあわててトイレに駆け込むがそこでさらに危機に陥つた。一瞬間違えて男子トイレに入つてしまつたと思ったがここは男女関係なく洋式が一つだけある事を思い出し安心する。だが俺はトイレの仕方がわからなかつた。

「ヤバい、漏れる。どうすりやいいんだよ」

俺が深い絶望感に襲われていると。

「先輩開けて」

佳代ちゃんの声がして俺は急いで扉を開ける。

「どうしたの、俺女子のトイレの仕方わからねえよ」

「先輩ズボンとパンツ降らして便座に座って

俺はすぐに言われたとおりにしてズボンを下ろしパンツをおろそうとしてあわてて口を開じて降ろし便座に座る。すると、俺の小さい胸が佳代ちゃんにわしづかみにされる。

「あっ」

また声をあげてしまつたが佳代ちゃんは気にせず手に力を入れる。そして俺は全身から力が抜けた。その時にか水がはじける音がした多分俺の尿が出たんだろう。というかいつまでも佳代ちゃんが胸をわしづかみにし続けるせいで体がだんだん熱くなつていくような気がして俺の呼吸が乱れて行つた。

「ハアハア、か、よちゃん、そろそろ、はな、して

「あ、先輩すみません」

ヤバかつた、俺が俺でなくなるまで数秒前と言つたところだった。今のは・・・・・感じてしまつたというやつなんだろうか、それにしてもすげー、気持ちがよかつた・・・・・。

「先輩、顔真っ赤だけど大丈夫?」

「うん、なんか今俺が俺じゃなくなるかと思つた」

「『めんなさい先輩ちょっとやりすぎちゃったかな、でもこれで先輩が感度高いってわかったからこれからこういう事何度もやつちやうかも」

それだけは勘弁して下さるマジで。俺マジで恐怖症になるかも・・・。

第六話 再認識

結局、佳代ちゃんがやつた事はただ単にやりたかっただけだったといつ。そのせいで俺は・・・・・。

「先輩大丈夫、一度出来ればそのあとはもう出来る・・・はず

「なんか、やっぱいいや」

何というか最悪な一日だつた。この後も何もない事を願いたいね。俺が軽くブルーになりながら席に戻ると静流が少し気にしていたようだが声はかけてこなかつた。お前はホントに空気が読める友達だな。俺がそう思つて席に着くと先ほどまであつた食べ物は全て消えていた。

「まさか静流、お前全部食べててくれたのか?」

「ああ、つたく今度からしつかり考えてから行動しろよな。まあ、美味かつたからいいけどな」

「ああ、ほんとに悪いな。つとめりやうか」

俺がそつ言つて伝票を取りうつとして手を伸ばすが誰かの手が俺が取ろうとした伝票をとつた。

「いいよ、俺が払うから

それは静流だつた。

「マジで、サンキュー」

「やつは～、これでまるまる1万円は俺のもんだ～。俺が内心でそうカーニバルを起こしていただが次の静流の一言で静まつた。

「女の子に払わせるのもあれだしな」

「やつぱ俺が払う

そう言って俺が伝票をかすめ取るうとしたが、ヒヨイッと俺の手の届かない高さにあげられてしまった。

「お～れ～が～は～ら～う～」

「払いたければ俺から伝票をとる事だな」

おのれえ、こいつ人がめっちゃ小さくなつたのをいいことに今まで出来なかつた意地悪をするとは。畜生こいつでけえ、俺が男のときは間違いなく俺のほうがでかかつたのに。俺は出来れば使いたくなかつた最終奥義を使う事にした

「ぐらえつ」

「なつ、何をする秋離れるお

俺が使いたくなかった最終奥義、それは俺が静流に抱きついてそして静流が俺を離そと手を下げたときに伝票をかすめ取る、最高な方法だ。ほら見ろ、もつ伝票が届く位置にあるぞ。いまだ。

「お前は考えがわかりやすい奴だな」

またヒョウトイと上にあがられてしまった。

「おのれえ、 静流めえ。 あきらめて俺にそれをひせえ」

「いや、 あきらめのはお前だい？」

「うひ、 くや。 あきらめるか。 そういうばばさつきから後ろから邪気がするのだが何だろ？ 俺がそう思つて後ろを見るとそこには佳代ちゃんがヤンデレモード（？）でそこに立つていた。

「お兄ちゃんばっか、 ずるいよ。 私だつて・・・ 私だつて・・・ 先輩をギュッとしたい」

は？

「もう我慢できなーい

やう言つて佳代ちゃんは抱きつく。 なにか柔らかいものが顔を埋めて窒息するかと思つた。

「はなせえー

「後5分」

いや、 後5分つておきのを先送りにしてる人じゃないんだから。 俺は頑張つて抜け出そうとするが無理だった。

「じゃ会計しますぞおー」

静流はもう言つてレジに行く。バツやり完璧にあきらめるとこいつ事だらう。

それから5分後に俺は離してもらい、今俺は3人で夜の道を歩いている。

「で、秋は明日学校行くのか?」

「うん・・・なんかお父さんが学校にももう立えてあるらしい」

「そりが、まつ頑張れや」

「他人事みたいだな」

「他人だろ?」

「そんな顔すんな、本当に冗談が聞かないやつだなお前は。出来なつ、こいつひでえ。大切な友達が困つてるつてのに他人事だからつて知らないふりかよ。」

「えつ?お前の席と俺の席は結構離れてるだろ?」

「まだ言つてなかつたな。今日席替えたんだよ」

なるほど、それでか。結構ラッキーだな。

俺たちがそんな話をしているうちこいつの間にか家についていた。

「じゃーなー」

「おひ、お前一人だししつかり戸締りしろよ」

「じゃあーねー先輩」

そして俺は一人になり家の扉を開け中に入る。今日はいろいろあって疲れてるしどとと風呂に入つて寝ちまおう。そう思ふ俺は風呂場に向かい。相当根性を出して服を脱いだ。

「いじじ見てみると、本当に可愛いな。なんか肌も白いし腰も細い」

残念ながら貧乳だがな。つて何を考えてるんだ俺は。

「やつれと風呂入つまおひ」

俺は頑張つてからだとを洗つてから風呂に入る。俺は風呂は好きだった。気持ちよくて温かいからな。でも今回は入つて数分でのぼせた。頭がぼーっとして思考回路が全く動かなく、ただ俺の生存本能が告げていた。これ以上風呂に入つてたら危険だと。俺はぼーつとしている頭で風呂から出てタオルを取ろうとする。そこで意識が途切れた。

第六話 再認識（後書き）

感想や修正点あつましたらジャンジャンビリーベル

第七話 田覚めの良い朝

学校の一室で俺は明美さんと会面した。

「「めんね、秋次君。 私あなたの事を好きになれない」

「えい、えい？」

「だつて、・・・・・あなたは女の子でしょ」

え？ 俺は体を良く見てみる。なんと俺は身長が物凄く低くなつていて男ならだれでも持つてる如意棒と宝玉がなかつた。

「そ、そんな馬鹿な」

「わよつなら秋次君」

明美さんが走つて行つてしまつ。

「まつて明美さん」

俺は追いかけるが体が小さくなつている為足も物凄く遅くなつてしまつているからすぐに見失つてしまつた。

「そんな、どうしてこんな・・・・・

俺はブルーになりながら家に帰つていた。

「よお、じうした秋

静流が現れた。

「ああ、 静流か。 実はさ・・・ 明美さんにフラれちゃったよ」

「そつか、 ・・・ 秋」

俺は返事をするがその時気がついた。あれ? こいつなんで俺の事秋って呼んでるんだ? 俺がそう思つていると静流が顔をちかづけて言つてきた。

「秋、 そんな奴の事は忘れて俺の彼女にならないか?」

「は? お前何言つてんだよ俺は男だぞ」

「お前に何言つてるんだよお前は立派な女じやないか」

そう言つて静流はさらりと顔をちかづけてくる。そして俺にキスをしようとしてくる。

「うわあああああああ

ドガツ-----

「いつてえ、 頭打つたあ。 つてこいは俺の部屋?」

俺はベットから落ちて頭をついていた。それを意味する事はつまり・・・。

「そつか夢だつたんだ、 そうだよ男が急に女になるなんて馬鹿げ

た話があるもんか。長い夢だつたな覚めてよかつた。あー、なんか
気分がめっちゃいい

俺は時計を見るとまだ6時だったが今日は特別気分がいいような
気がしてもう学校へ行くことにした。俺は壁に掛けられている学ラン
に手を伸ばしハンガーから引っ張るように学ランをとり俺は着替
えた。その時に何故か着にくかったような気がしたがたいして気に
もせず別に腹も減つていなかつたので朝飯は抜きにして革靴を履いて
家を出る。

玄関の扉を開けると外は雨が降りそうな天氣だったので俺は折り
畳み傘がバックに入つているか確認してそのまま家を出る。妙にバ
ックが重かつたがそれもまた気にしなかつた。革靴がブカブカだつ
たのだが多分お父さんとの間違えたのだらうと思つた。

あれ？俺なんでお父さんつて思つたんだ今までオトンつて言つて
たのに・・・まあいつか。

そんな事を考えながらしばらく歩いていると前に一人の男子生徒
が見えた。

「おーい、静流～」

「お、秋か今日ははええな、どうした

「いや、なんか妙に田代覚めがよくつてよ

俺がそういうと静流は少し顔に笑みを浮かばせた。

「よかつた、よく眠れたんだな。あんな事があつたから眠れない

かと思つてたんだけど。それにしてもお前妙に顔赤くないか?」「

「あんな事? 昨日なんかあつたつけ?」

「は? お前何いつてんの昨日女になつたつて騒いでたのはどこの?」「

まさかだつてあれば。

「つや、そんなあれば夢だろ。清流までどうしたんだよ。俺が見た夢と同じ夢を見たのかよ、すごい偶然もあるんだな。ついでにお前身長急に伸びてないか?」

俺がそういうと静流は手を額に当たしてあがやーってポーズをとつ。

「秋、これを見ろ」

静流は鏡を取り出す。「イツ鏡なんて持ち歩いていたのかよ。俺がそう思つて鏡をのぞきこんでみると俺が映つているはずのことここ美少女が映つっていた。

「何だこれ、新手のびっくりか? カメラはどこに仕掛けあるんだよ」

俺がそう言つてしまわりを見るしぐさをしていると静流が俺の胸に手を当てた。

「ひやう」

その時俺は変な声をあげてしまった。

「なつ何すんだよ」

俺が少しあわてていると静流が。

「まだ気がついてないのか。お前が夢だと思っていたのは夢じゃ
ない、それはうつづだ」

「うつづ…うつづ…うつづ…うつづ…ああ現か、現つて
いうとたしか現実って意味だったな。それはつまり…

「ないつ、ないつどこへ行つたんだ俺の　　と　　は」

「おいつ、女の子がそんな卑猥なピーっとかの効果音で消えてし
まいそうな言葉を叫ぶな、そこのりのサラリーマンがこっちを見て
るじやんか」

嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ。俺はしばしの間放心状態
になつた。その時あたりが次第に明るくなり始めた。

「おつ、晴れてきたな」

静流がそう言ったのを命日に俺が放心状態から回復して目をあけ
るとそこにはまばゆい世界が広がつていた。

「うつ、まぶ…しぃ

「えつ、あつ」

静流はそう言ってから学ランの上を脱いで俺にかぶせた。

「なつ、何すんだよ

「お前日光過敏症だろ。あんまり田てあたるんじゃねえ」

「うだ、しかもお父さんは重度のって言つてた気がする。まさか命にかかるのか?と俺が思つてこると。静流が急に俺を抱き上げ。

「学校まで走るが」

と黙つてそのまま走つて行つた。俺はそれもまたになつていた。

第七話 目覚めの良い朝（後書き）

小説を書いてるときにふと気がついた事があります。それは・・・
チャック全開じゃつたわ／＼／ｗｗｗ

感想や修正点などあつたらお願ひします。

第八話 僕の居場所

「ゼニゼニ」

「静流大丈夫か？」

静流は明らかに疲れ切っていた。まあそりゃ俺を扱いだまま数百メートルも全力疾走してたからな。

「全く、ゼニ、問題、ゼニ、ない」

「多分誰から見てもお前は今疲れきってると思つぞ」

しかし流石陸上部。30秒ぐらいで呼吸を整えた。

「で、どうするんだ？まずは・・・普通に考えて職員室に行く事だよな」

俺は結構しんどそうに歩いた。これから起こる事を考えたらしんじく思わないほうがあかしい。一人の女の子が学ランを着て昨日の朝起きたら女になつてましたなんて誰が信じると思つ？俺だつて信じられないよ。

俺は下駄箱の前まで來てある事に気がついた。俺の下駄箱は一番高い位置になり男のときでも少し手を伸ばす必要があった。それがこんなに小さくなつたらどうなると思つ？届くわけないじゃないか。俺が困つていると。

「やつぱりな、手が届かないんだろ。とつてやるよ」

静流が来てくれた。こいつって女視点からみると結構イケてるやつじゃないか。俺が女だったら惚れてるかもな。おっと、あくまで女として生まれていたらだからな。

俺は静流がとつてくれた靴を履いて職員室に向かつ途中に、担任に遭遇してしまった。

「おや、君は秋次く、秋さんね。事情はお父さんから聞いているから安心しなさい」

え？ お父さんが。あの人ナイスだな。

「とりあえず、これが出来るから更衣室で着替えるといいわね」
先生がそう言って一つの箱を渡してきた。何だこれ？ 俺はそう思ひながら箱を開けてみると中に入っていたのは女子の制服だった、俺が通っている学校は男子は学ランで女子はブレザーでおまけに超がつくほどのミニスカだ。俺がそれを見ているとある事に気がついた。

「え、まさか。これを着ひなんて言いませんよねえ？」

「何を言つてゐる、これ以外に何があるつているの。はい、これ女子更衣室の鍵と制服と一緒に届いたものがあるわ」

「えつ、ちよ、俺が女子更衣室を使うのはまずいんじゃないですか？」

「何いってるの、可愛い美少女が女子更衣室使つて何がいけない

の？」

たしかに今の俺の体は女だが中身は男だぞ。って言つても無駄か。それにもしても一緒に届いたやつって何だ？俺がそう思つて開けてみると中にはパンティーなるものとかにも女子が着るようなヒラヒラしたシャツが入つていた。つまり、これを着ろという事か。

「そういう、お父さんが秋さんは今日休むつて言つてたけど結局来たの？」

お父さんが今日は休むつて言つたのか。なんでだ？俺はそう思つがわからないのでとりあえず女子更衣室で制服に着替えることにいた。ブラとかはなかつたのでホックの心配はなかつたがいろいろと女子の制服を着るのには抵抗があつた。それになんでこんなにス力なんだよ、靴下が通常のサイズで足がめっちゃ露出しているのだが気温は低いので物凄く寒かった。俺は静流が更衣室の前で待つていたので早めに出た。すると静流が俺の体中を良く見てから。

「すっげ、可愛いなお前」

「可愛いとか言つたな、この服装はめっちゃつらい。羞恥心とかめっちゃスースーして寒いし」

俺は静流に可愛いと言われたときに体が物凄く熱くなつた気がした。まさか俺は照れているのか？いやそんなことはない。これは、そう・・・ただ恥ずかしがつていてるだけだ。

俺は着替えた後に職員室に戻りそのまま朝のHRまで待機しHRクラスの皆にうち明ける事になつていた。

「それじゃあ秋次ぐ・・・・じゃなくって、秋さん入って」

俺は先生に呼ばれ教室に入る。事情等はあらかた先生が先ほど説明してくれたので俺は説明する手間が省けた。俺はゆっくりと教室に入ると皆の間でじよめきが起きた。どうせキモイとか言われてるんだろうな。つい先日まで男だったやつが急に女になってるんだもんな。そう思わないほうがありえない・・・・。俺がここで頭の中で言つて居る事を遮ったのは女子達の言葉だった。

「キャー、可愛い。」ひつひついて

とそれに続き男子が。

「秋次、じゃなかつた秋ちゃん俺と飯を食おうぜー

とか言つてゐやつがいる。またかこことひらめ。

先生が俺の考えて居る事を呼んだよつて言つ。

「どうやら、彼らは貴女の事を受け入れてくれるみたいですね」

俺はそれが嬉しかつたが勘違いだつたらいやなので一応聞いてみることにした。

「あの、皆は・・・俺の事、受け入れてくれるのか?」

俺が聞くと皆は「当たり前だろ、お前がたとえありんこになっちまつても大切な友達だよ」とか「秋次君は、女の子になつて名前が

変わつても私たちのクラスメイトだよ」とか言つてくれた。

俺はうれしくつて泣いてしまつた。そして男子から女子まで皆が俺の周りに集まつてきてこれからも宜しくなとか言つてくれた。

「皆、ありがとう」

「秋ちゃん、泣くなよ」

静流がそう言つてハンカチを渡してくれたので俺はそれで涙をぬぐつた所で。

- - - ガラツ - - -

扉が急に開き皆がそつちを見るとそこには一人の男がたつていた。

「お、お父さんどうしてここにいる？」

俺はそつとつた。

第九話 僕って鈍い？

そこにはお父さんがたつていた。

なぜここに元ど思つて聞いてみるとするがそれは遮られた。

「全くお前は、熱が39・5度もあるつてのに良く普通に学校来れたな」

「へ？」

39・5度つて普通相当つらいはずだが・・・・。もしかしてさつきまでの体が熱いと思っていたのはそれか。僕つてそんな鈍くなつてたんだ。39・5度と聞いてクラスがざわざわしている。

「今朝帰つてきたと思つたらお前が風呂場で倒れてたんだよ。多分のぼせたんじやないか一応体温測つてみたら39・5度行つてたんだよ

お父さんがそう言つてそのあとに静流が僕のデコに手を当てた。

「えーっと・・・・ってあつつう。お前良く普通でいたれたな。これは相当やばいぞ」

僕も自分のデコに手を当ててみるとからだじゅうが熱くなつていたからよくわからなかつた。

「あの先生、今日は早退をせたいんですけどその際に静流君をお借りしたいのですがよろしくでしょうか？」

「ええ、良いですがどうして静流君なのですか？」

お父さんと先生が聞くと。

「静流君は家が近いのでいろいろとこれから世話になると毎回の秋の事についていろいろと話しておきたいのですよ」

「そういう事なら了承しましょ。静流君、あなたは良いですか？」

「はい、俺は大丈夫です」

そして俺と静流はお父さんが運転する車に乗つて俺の家に向かう。車に向かうまではあまり無理させないためにと静流が俺をおんぶしてくれた。あいつにはそのうちたくさんお礼しないとな。俺はどうやら車に乗つっているうちに眠つていたらしく気がつくと俺の部屋の俺のベッドで寝ていてその時には一人の話も終つていたらしく静流は学校に戻つていた。

「俺、これからどうなるんだろうなあ

と呟いてみるとむなしく何も帰つてこなかつたし俺はずいぶん疲れていたのでもう寝ることにした。

どれくらい眠つたのだろうか、お父さんに起こされ俺は体温を測り平熱（男だった時の）になりそれを確認してお父さんは話始める。

「お前こは病気の事を重度と言つておいたはずだが覚えてるか？」

「うんまあ

多分日光過敏症の事だろう俺は返事をする。

「その事なのだが、お前をだましていたよつて悪いんだが本当は軽度なんだ。重度と言つておいて静流君がどれくらいお前の事を思つて行動してくれるか調べておきたくて彼にどう対応したのか聞いたが彼はやさしい人だな。俺は秋を彼になら任せていいいと思つているぞ」

その言い方結婚するみたいな言い方なんだが、そう聞こえるのは俺だけだろうか？

「他には、まああまり長い話もなんだ、何かあつたら彼に甘えるといい。それだけだ、あと今日愛華が帰つてくるからいざ」

愛華と言つのは俺のアネキで今高校3年だったはずだ。遠い学校で寮生活なのでお正月と黄金週間とお盆とあとまたに気が向いたときくらいにしか帰つてこない。たぶん俺の事を聞いて帰つてきたのだろう。俺が今相当恐れていていたのはアネキの帰還だったのかもしない。俺のアネキと言うのが物凄くブラコンで俺が小さな時はいろいろやられても少ししか抵抗できなかつたが最近ではもう簡単に逃げ切れたのだが・・・・・多分今では何の抵抗も出来ないのだと思われる。

「ははは、そんな顔するな。愛華に女の子としての常識をいろいろ聞いてみれば良いだろ」

「うーん、正直言つて怖いかもなあ。まじで今の俺になら何されるかわからないし」

俺は出来る限り武器を準備しておこうと思った、まあ俺のアネキは見た目は華奢なのだが異常なほど体が丈夫で俺が一番驚いたことは3階のベランダから飛び降りて普通に着地出来た事だった。本当にあれは人間か？何かの間違いで生まれてしまった魔神とかではないのだろうか？

俺がいろいろと考えていると玄関の扉が開く音がして。ツイーキヤガッタと心の中で叫び絶望を味わっていると。帰ってきたのはお母さんだった。心臓に相当悪い・・・。

結局その日アネキは帰つてこなく俺は風呂に入つてすぐベットにもぐりこんで睡眠に入る。まだ風呂とかにはなれるのに時間がかかると思う。自分の裸を見て鼻血が出てしまったのはだれにも言えない事。

次の日の午後1時に誰かが水木家の家に入る、そしてその誰かはまっすぐに俺の部屋に入ってきて俺にゆっくりとちかずいてくる。俺は寝ているのでその人影に気がつく事が出来なかった。

第九話 僕って鈍い？（後書き）

なんだか一日間みてなかつたらお気に入り件数が一気に増えていて驚きましたwww
もしよろしければ、この小説は一話一話がもつすこと長い方がいいなどの要望が当たつたらお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2088z/>

秋の夕暮れ

2011年12月17日20時49分発行